

令和 7 年 9 月 30 日

登山教室 Timtam 御中

講師会員 吉井英生

登山報告書

この度、インド共和国・ラダック地方のカンヤツェ 2 峰(6270m)に登頂してきましたので、ご報告致します。

1. 8月6日（水）東京羽田空港から空路、インド・デリーへ
2. 8月7日（木）デリーから空路、ラダック地方の中心地レー(3505m)へ、市内観光とともに、ホテルで休養及び装備全体のチェックを行う
3. 8月8日（金）午前は、高度順化のため、カルドゥン・ラ(峠、5359m)へ、その後、休養及び市内の散策



カルドゥン・ラ（峠）における高度順化

4. 8月9日（土）マルカ谷のキャラバン開始、ハムルジャ(3500m)のキャンプ地（歩行3~4時間）～



キャラバン出発点（スキー）



荒涼とした河原道を歩く



ハムルジャのキャンプサイトへ到着

チリングからハムルジャまでは車道があるが、地元の人がトレッキング等の観光で、大量の車が通るのを嫌がっており、途中のスキーから歩きになった。隣接する名峰・ストック・カンリ(6137m)が、環境問題で登山者と地元の人とがトラブルになり、2019年夏以降に登山禁止になったことから、カンヤツエ峰をそうしないように、地元の人との関係の良さを保つのに気を使った。

5. 8月10日（日）ハムルジャからマルカ(3750m)へ

マルカへのキャラバンは、酷暑の中、延々と続く河原道を行く。ただし、日本と違いそのスケールの大きさに驚く。米国のグランドキャニオンに似た風景である。熱中症に気をつけながら、約13km、およそ5時間の道のりをひたすら歩く。

途中、渓谷に緑が現れるところもあるが、ほとんどが荒涼とした土漠である。インド・ラダック地方は小チベットを呼ばれる仏教の聖地であり、途中にチベット仏教の祈りの場が現れる。

荷物は馬が運ぶヒマラヤ登山のキャラバンを初経験する。



相変わらず荒涼としたマルカ谷を行く



荒涼とした河原にたまに緑が現れる



チベット仏教の祈りの場



荷物を運ぶ馬たち



マルカのキャンプサイトにて

6. 8月11日（月）マルカからタチュンツェ(4240m)へ

約15km およそ7時間の渓谷の登りであり、登り500mの長丁場になる。気温が高く、ザンスカール川（インダス川の源流の一つ）の水量が午後になると一気に増す。カンヤツェ峰の氷河が溶けて増水しているのだ。途中、やっと、カンヤツェ1峰が見え、ヒマラヤ登山に来た実感が湧く。この頃になると、公募で集まった登山メンバーとガイドにパーティーという意識が醸成されてきた。

本日の最大の難所は、増水した河川の徒渉だった。我々日本隊や欧米隊が皆協力して徒渉する。こうなると、ガイドもパーティーの垣根を越えて協力する。この徒渉は、増水した氷河からの激流を渡るもので、往路のキャラバン最大の難所であった。

徒渉が終わると、道は右岸の渓谷沿いに変わり、相変わらず荒涼とした渓谷をのろのろと進むと、タチュンツェのキャンプサイトが見えてくる。本日の長丁場もやっと終わりと思うと、安堵の気持ちが湧いてきた。



再び、マルカから暑さの中をキャラバン開始



カンヤツェ 1峰がやっと顔を出す



増水した河川の徒渉



道が右岸へ曲がる



タチュンツェのキャンプサイトが見える



タチュンツェのキャンプサイト

7. 8月12日（火）タチュンツェに滞在し、高度順化及び休養、さらにザイルワークのチェック

8. 8月13日（水）タチュンツェからカンヤツェ峰ベースキャンプ（BC 5050m）へ

休養日の翌日、BCへと出発。気になるのは天気だ。昨日は、出発以来好天が続いていたのだが、午後、雨が降った。雲の量も増えてきて、天気は降り坂である。

本日は距離が短い(約7km)が、約800mの登りであり、時間もおよそ6時間の行程だ。しかし、BCにつけば、カンヤツェ1峰、2峰の勇姿が間近に見られる。それを楽しみにひたすら登る。峠に着くと、トレッキングコースとカンヤツェ峰登頂に向かう道の分岐があり、カンヤツェ2峰を初めて見ることができる。

峠を越えると、草原状の登路を行く。野性の牛を見送ると池(ツインレイク)が現れる。ここまで来れば、BCは間近だ。しかし、またも雨が降り出した。雨具とザックカバーを出して、雪渓から流れてくる流水帯を徒渉しながら登る。天気は確実に下降局面である。

BCに着くと、あちらこちらにナキウサギが現れ、心が慰められる。私は、登頂ルートの確認のため丘に登り、携帯電話のカメラを最大倍率にしてカンヤツェ2峰を登高する雪面の撮影を行った。どうやら、極めて急な斜面はなく、いつも通り歩けば登頂できそうだ。



タチュンツェからの登路を行く



峠から見るカンヤツェ峰



峠を越えると石柱状の地形が左側に現れる



仏様が備えられている池（ツインレイク）に着く



ベースキャンプ（B C）下の流水帯を行く



カンヤツェ峰BC



BCではナキウサギが間近に見られる

9. 8月14日（木）～8月15日（金） 停滞

レーにいるところから、ネットでラダック地方の天候を継続的に観察していたので、14日の午後から天気は降り坂になると予想できていた。本日は午前中に最終ミーティングを行い、午後は仮眠。夜9時起床、10時出発で、15日の午前中にカンヤツェ2峰登頂の予定である。しかし、夜9時に雨が酷くなり、12時まで待機になるが、雨は止まない。この分だと山頂は雪になっているし、夜が明けても視界が効かない。結局、ガイドリーダーのラクパ氏（ネパール人、エベレスト2回、ダウラギリ、チョーオユーと8000m峰4回登頂）の判断により、翌日の予備日を登頂日に使うことになった。

夜が明けると、やはり、高度の高いところは雪に覆われていた。その日は再び停滞し、夜9時起床、10時出発でスケジュールは変わらないが、悪天候がもう一日続くと下山しなければならない。

私が知る範囲で、BCにはカンヤツェ2峰を目指す、スペイン隊とフランス隊、インド隊（1峰と2峰両方登るという）がいたが、スペイン隊とフランス隊は悪天下でも出発して登頂し、午後にBCに帰ってきた。スペイン隊はヒマラヤ登山に慣れた様子の登山隊なので、いろいろ状況を聞いてみた。「天気がナープだった。頂上に着くと雪が降り出し、雷も鳴っていた。タフな登山だったが、我々がトレースを付けてきたので、日本隊の負担は軽減されるだろう」というのがスペイン隊の方の見解であった。なお、インド隊の動静は不明だった。その日は、2時間ほどハイキングをして体調を整えた。



べったり新雪がついたカンヤツェ峰

10. 8月15日（金）～8月16日（土） 登頂

夜9時起床。軽食を採っていると雨がパラパラ降ってきたがすぐ止んだ。夜10時、出発時には満点の星空だった。風もなく、登頂に絶好の天気となった。1日待って正解だった。今日は最大15時間行動になる。カンヤツェ1峰は、BCから稜線上にアタックキャンプを設置して、そこから技術的に高度な氷壁の登攀になるが、カンヤツェ2峰はBCからの雪面登高の一発勝負になる。標高差約1200mをひたすら雪面を登る。従って、最大の課題は、体力と気力、高度障害（高山病）とタイムリミットだ。

懐中電灯を出し、荷物を最大限軽量化して出発する。まず、目指すは、5500mの雪面に入るポイント（ガイドはグランポン（アイゼン）ポイントと言っている）だ。苦しい岩場の登りを懐中電灯の明かりを頼りに、闇夜の中をひたすら登る。先頭を行くラクパ氏のスピードが速い。体調不良の方1名がBCで登頂を断念したので、日本人7人パーティー、ガイドはネパール人（と思われる）3人の構成だ。5500mまでは1人荷揚げのサポートが付いた。また、日本人2人が山頂まで荷揚げをしてくれるプライベートポーターを雇っているので結構な人数となった。

5500m到着は午前1時30分だった。ここで、アイゼンとハネースを装着してアンザイレンする。ここでスピードの速い1次隊とスピードの遅い2次隊に分かれる。私は2次隊に入った。1次隊にはラクパ氏と日本から帯同した旅行会社の日本人添乗員（実質的なパーティーリーダー）が付いた。2次隊には、アシスタントガイドのダワ氏が先頭、スタンジン氏が最後尾、私は、スタンジン氏の前に入り、日本人パーティーの最後尾になった。ここからは、調子が悪くなった人は、必ず、ガイド又は添乗員を付けて下山するので、各隊がこの権利を2回行使すると、1次隊、2次隊とも、隊ごと全員下山となる。ダワ氏は酸素ボンベを背負っているらしく、ザックが重そうだ。

私は、スタンジン氏とコミュニケーションを取りながら雪面を登るが、日本の山ならば慣れているのでなんともない状況でも、初めてのヒマラヤ6000m峰なので慌ててしまって、何回かスタンジン氏をひやりとさせるような、バランスを崩した状態になった。また、登れば登るほど酸素が薄くなるのでとにかく苦しい。アイゼンでザイル踏んではいけないと

いうのは、登山の「基本中の基本」だが、ともかく苦しいので無意識にザイルを踏んでしまう。その度にスタンジン氏に注意される。その通り。誰かが、斜面を滑落した場合、このザイルで止めねばならないのだ。

闇夜の中を3時間ほど登つただろうか、雪面の斜上から、山頂への直登に変わる場所で大休止する。1次隊は随分先に行ったようだ。しかし、闇夜の中だから、懐中電灯の明かりと月明りに照らされる雪面しか見えない。ここから、山頂への直登が始まり、さらにしんどくなる。しかし、2次隊のパーティーは誰も音を上げない。1次隊の誰も下山してきてこないから、パーティーの誰も、下山を申出ないのだ。私は、今まで40年余りの様々な登山シーンを想った。ここが、我が登山人生最大の踏ん張りどころであるのは確かだ。

酸素は益々薄くなり、口から心臓が出てきそうにしんどい。やがて、背後の山の端に夜明けの薄明かりが見えた。そして、やがて夜明けが訪れ、視界が明るくなった。いきなり下界に緑豊かなマルカ谷が現れた。志賀直哉作「暗夜行路」の最後の夜明けのシーンは「こんな感じなのかな」と思えた。

時間は多少戻るが、夜明け前に、欧米人のパーティーが我々2次隊を追い越していくたか、苦しくて口がきけないため、簡単に挨拶するのがやっとだった。ただ、その欧米人隊が、明るくなった空の下、雪稜の向こう側の岩場の先で、「ありがとう」と日本語にて大声で喋っているのを聞いて、1次隊の登頂を知った。スタンジン氏は「ここから30分で頂上だ」と言う。ダワ氏とスタンジン氏の献身的なサポートにより、頂上直下で何回も休みながら、我々2次隊が岩峰に到達すると1次隊が下山してきた。岩峰を越えると、もうこれより高い所はない。ここが頂上(6270m)だ。

2次隊パーティーメンバー3人で感激の握手をし、記念撮影開始だ。持ってきた日の丸の旗がうまく開かない。メンバーの1人に助けてもらって日章旗を胸の前にかざした。目の前には、すぐ先にカンヤツエ1峰(6401m)が迫力満点で聳える。登頂は、午前7時59分、実に山頂まで10時間余りかかった。

頂上にどれくらいいたどうか。ダワ氏に促されて下山を開始する。帰りは、スタンジン氏が先頭、私が2番目、ダワ氏が最後尾で、登りと逆の順番になる。

しばらく2分くらい降ると、視界に青い模様がパチパチと現れた。高度障害だ。酸欠で脳細胞が死んでいるため、それが可視化され、視界がTVの壊れる前の映像みたくなるのだろう。幸い降りだったので、酸素が濃くなると自然に視界が治った。

帰りは、登りより更にゆっくり、随所で小休止をとり、下山に時間がかかった。5500mのポイントでアイゼンとザイルを外し、石ころだらけの山をB Cめがけて降りてゆく。B C到着は午後12時30分過ぎ。実に、約15時間行動であった。B Cでは、ラクパ氏はじめ、1次隊に出迎えられたが、よれよれだった。1次隊と2次隊の登頂の時間差は15分くらいだったそうで、思ったより開いていなかった。

これが、ヒマラヤ登頂というものなのだろうか。感激とか、大喜びというより、「一事終えた」という感情で、案外、淡々としていた。



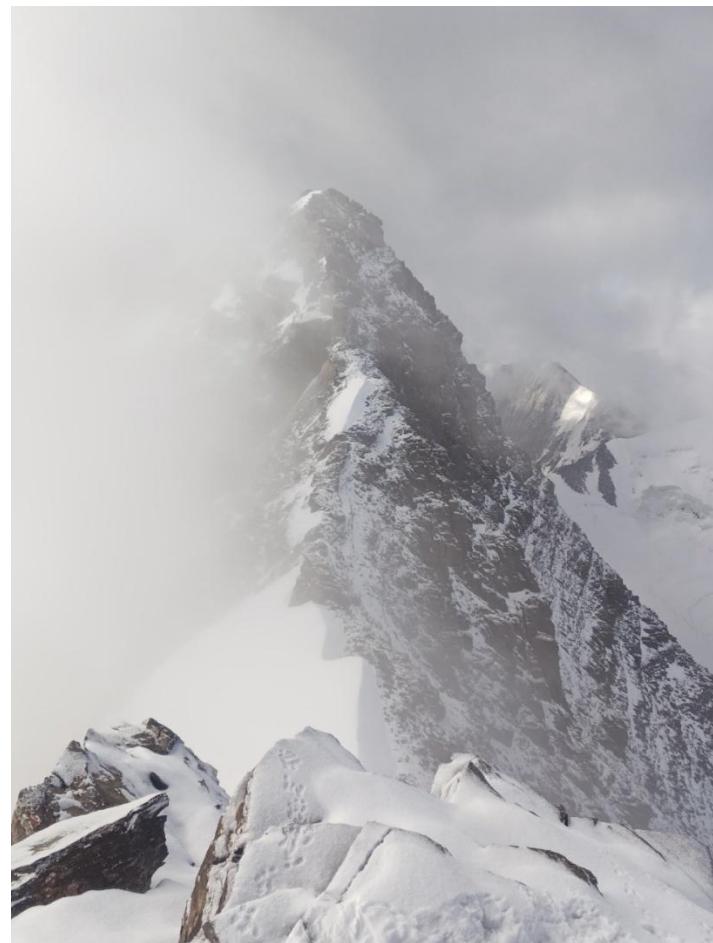
カンヤツェ 2峰登頂、しんどいので、にこやかな表情が作れない



カンヤツェ 2峰 2次隊登頂写真



カンヤツェ 2峰頂上直下、人物はスタンジン氏



カンヤツェ 2峰頂上から見たカンヤツェ 1峰



カンヤツェ 2峰登頂イメージ



下山中に見降ろす緑のマルカ谷、人物はスタンジン氏



カンヤツェ峰全景（左が1峰、右が2峰）

11. 8月17日（日）下山

帰りは、BCより、ニムリン(4740m)を経て、ゴンマル・ラ（峠 5260m）を越えるなかなか手強い下山ルートである。6270mに登頂した体には厳しい。約16km、8時間余りの行動時間になる。ゴンマル・ラでカンヤツエ峰に別れを告げれば、V次谷の中の急な山道をひたすら下山する。

途中、足の踏ん張りが利かなくなってきたが、なんとか、チョグドウ(3980m)に降りた。ここから2時間、車に乗ってレーのホテルに向かう。ホテルに着いたのは夕方6時過ぎ、夜7時からホテル近郊のチベット料理のレストランで打ち上げを行い。登頂の成功を皆で祝った。



ゴンマル・ラ（峠）にて



V字谷の下降



チヨグドゥへ下山

12. 8月18日（月）帰国

空路、レーからデリーへ向かった。デリーでは、フマユーン廟を観光してから、お土産を免税店で買った後、デリーの空港で解散式を行い、夜行便で空路、羽田に帰国した。

13. 8月19日（火）解散

朝、羽田空港で流れ解散となった。

14. 所感

大学を卒業して就職した民間会社において65歳まで働くつもりであったから、ヒマラヤ登頂は諦めていた。従って、国内の山登りに集中していた。しかし、あの3.11で運命の歯車が狂い、その会社を辞めた。その結果、今回のヒマラヤ6000m峰登頂という登山人生の最大の目標に到達することが出来た。

① 山の選定

現在もシンクタンクの職員なので、休みは取れても2週間程度という制約がある。また、夏期に休みが取りやすいので（シンクタンクのお盆休みと重なるので）、そうなると、インド・ラダック地方の6000m峰が目標になる。ラダック地方には、夏は雨期で登れないネパールと異なり、雨期・乾期がなく、夏も乾燥している。良く登られていたストック・カシリが登山禁止になったので、自ずと目標はカンヤツェ2峰となった。

② G H T Pに参加した意義について

G H T Pのインド遠征で、カンヤツェ2峰に隊員2名が登頂していたので、情報を事前に入手でき、「この山なら行けそうだ」という感触があった。G H T Pでは休暇日数の制約で、結局、遠征に参加できなかったが、東京で開催される集会にマメに出席して、ヒマラヤ遠征の概念を掴んでいたことが大きい。

なお、いずれも失敗したが、南米の6000m峰であるエクアドル・チンボラソ峰（令和元年は旅行会社のツアーで、令和5年は個人山行で遠征）の存在もG H T Pで知ったので、G H T Pに参加していなければ、6000m峰を登頂することは出来なかつたと思う。

③ 今回登山の成功要因

第1に、ガイド3名の献身的なサポートが挙げられる。彼らには、ともかく我々を登らせようという気持ちが素直に表れていた。第2は、公募によるツアー登山であったにもかかわらず、登頂意欲の高い、協調的な人が集まつたことだろう。7人（添乗員・実質的なパーティーリーダーを除く）の日本人の中で本格的な登山を経験しているのは私を含め2名であったが、2名がストック・カンリ登頂経験者、1名がパキスタンの6000m峰登頂経験者、3名がキリマンジャロ登頂経験者、1名が令和6年度のカンヤツェ2峰の遠征経験者（この遠征は同じ旅行会社のツアーで、登頂失敗に終わったが、その方の話を聞くと、登頂のために必要な修正点が良く理解できた）と経験値も揃っていた（上記実績には重複あり）。第3は、日本人添乗員（実質的なパーティーリーダー）が信州大学山岳部出身で、ヒマラヤ遠征経験者であり、良くヒマラヤ登山を知っていたことである。最後に、天候に恵まれた。悪天候は8月14日から15日にかけての気圧の谷の通過のみで、概ね晴天・微風が続いていたことが挙げられる。

④ 旅行会社の利用について

本来、登山とは、自分で企画し、実行するものである。今回は（株）西遊旅行のツアー登山に参加したわけだが、結果として、正解であった。インドにおけるヒマラヤ登山は初めてであり、インドは登山に様々な許可が必要で、現地で急に、インド人医師による健康診断が必要と言われるなど、様々な関門があったが、旅行会社が付いていたのでそういったトラブルに何とか対応が可能であった。また、出発前に富士山に通うだけでなく、日本で減圧室に入ったが、この減圧室は旅行会社に紹介されたもので、出発直前に高度6000mを疑似体験できた。現地では登頂時以外、高度障害が出ず、一定の効果があったものと思われる。

⑤ 最後に

登山に終わりはない。年齢的には、あと10年登れるので、次回は、自力で企画し実行するヒマラヤ登山をやってみたい。そのために、しばらくは、この成功に奢ることなく、日本国内での山登りをしっかりやっていきたい。私の登山はまだ未完である。

以上